

次世代への期待と責任

理事長 廣 田 勇

一般社会はもちろんのこと、学問の諸分野においてもその活動内容は常に時代とともに変化してゆきます。気象学会を取り巻く諸姿勢もその例外ではありません。十年前二十年前の状況を想起してみただけでも現在と明らかな差異のあることに気が付きます。

具体的に言うなら、気象学大気科学の研究テーマの変遷は春秋の大会におけるセッションやシンポジウムの題目を見れば明らかでしょう。新しい用語や概念が次々と現れてきたことのみならず、気象力学・雲物理学・大気放射学のような一見古典的な分野においても現代的な問題提起が数多く見られます。特に地球環境問題などでは、以前には境界領域として扱われていた様々な分野やテーマが今や気象学気候学の中心課題となってきました。

研究環境についてみれば、衛星やレーダーに象徴される種々の観測手段やインターネットによるデータの流通、数値モデル計算などの技術的発展などに加えて、国際間の研究交流機会の飛躍的増大、さらには大学や研究所の組織・機関の制度改革等々、ひと昔前には考えられなかったような新しい状況が生じています。

このことは、近代科学成立以来の数世紀に亘る歴史に見られる必然的な時代の流れであると言ってしまうとそれまでのことなのかもしれませんが、最近の状況変化の加速度はやはり過去に類を見ないものとも言えます。

そしてまた、研究を取り巻く環境変化の持つ意味を考えると忘れてならないのは、研究者ひとりひとりのライフタイムの長さや状況変化の時間スケールとの関係です。大まかに言って、個々の研究者の活動期間を二十代前半からの約半世紀とすれば、気象学を学び始めた時期に身に付けた学問体系の基礎を生かして研鑽を続ける中で、常に新しい変化を取り入れつつ時代との折り合いをつけていく必要に迫られます。

しかしながら、一人の人間の為し得ることには限度

があります。そこで重要なことは、若いときから学んできた内容を、個々の知識や研究成果のみならず学問の信念・哲学をも含めて次世代の人々に正しく伝えてゆくことです。つまりそこには後継者育成という大きな課題があることとなります。これは単に地学教育のカリキュラムを工夫したり大学の研究室で大学院生の指導に時間を割くといったこと以上の大問題であるはずです。

翻って考えてみるに、近年の気象界ではいわゆる大型プロジェクトが活発です。多大の研究予算を取り、多数の独立研究者を集めたチームを結成し、従前には不可能だった新しいテーマに挑戦することは確かに現代的意義がありましょう。だが、五年十年というプロジェクト期間が終了したときそこに何が学問的遺産として残されるかを十分に反省してみる責任があります。新しい自然現象の発見や知見の蓄積、理解の深化、さらには気象学大気科学としての一段と高い学問体系の構築等々の目標達成は当然ですが、加えてもうひとつ、そのプロジェクトの実行を通して次世代研究者たちが如何に力を付け成長したかが問われなければなりません。これこそまさに、指導者としてのプロジェクトリーダーに課せられた最も重要な責務であるに違いありません。若い人々の側から見れば、大型プロジェクトへの参加がいつかの傭兵に終わることのないよう、自己の将来を見据えた確固たる意識が必要です。

気象学会は来年(2007年)には創立125周年を迎えます。現在、理事会の中の各委員会がその記念事業の立案を行なっています。しかし言うまでもなくこの記念行事は単なるお祭りではありません。「温故知新」の言葉通り、先達が残してくれた多くの学問的遺産を正しく受け取り、それを次世代に継承してゆくことによって、やがては気象学の未来を担う若い世代の中から新しい時代に適応した優れた成果が生まれてくることを強く期待したいものです。